

『ハヴロック』における語順について

濱崎 孔一廊

(1994年10月17日 受理)

On the Word Order in *Havelok*

HAMASAKI Koitiro

0. はじめに

韻文の語順については、韻律・脚韻の影響を強く受けるために、従来は調査が困難とされてきた。しかし、最近の言語理論の発達によって深層構造という抽象的なレベルでの語順の研究が進んだことから、表層に現れた語順も、文体的な規則を取り去った深層構造での語順を特定できれば、その統語構造の解明が可能ではある。

そこで本稿では、ME 期の作品『ハヴロック』を取り上げ、その語順を解明することによって、この作品における統語構造を明らかにしていくことを目的とする。本論の主張をまとめると、次のようになる。

- (1) 『ハヴロック』における英語では、韻律・脚韻の要請によって一見ばらばらな語順を示しているかのように見えるが、文体上の操作を取り払うと、主節も従属節も一定の定まった基底語順 SVO を持っている。
- (2) 『ハヴロック』に見られる多様な語順は、いくつかの文体上の操作の他に、代名詞類が接語 (clitic) として機能しているためである。

1. データ

例文の収集に際しては、最も新しく信頼性の高い Smithers 編集によるテキストを採用した。もちろん、他のテキストや写本も参照したが、解釈が一定していない例や曖昧な例は除き、明確な例文だけを分析の対象とした。^{1, 2}

それぞれの場合における語順の型とその生起する度数およびパーセンテージを示し、おのおのの具体例をひとつずつ示す。

1.1.1.1.定形動詞のみを含む主節(ただし,主語・目的語いずれも代名詞類ではない)

I. SvO	21	70%
II. SOv	4	13%
III. OSv	1	3%
IV. OvS	4	13%
計	30	

- I. SvO Haelok shof dun nyne or ten (872)
 “Havelok pushed down nine or ten”
- II. SOv And for þat Grim þat place aute (744)
 “And for that Grim owned that place”
- III. OSv Jn þat time al Hengelond /þerl Godrich hauede in his hond (1000-01)
 “At that time Godrich had all England in his hand”
- IV. OvS An mikel sorwe haueden alle — (238)
 “And all had much sorrow”

1.1.1.2.定形動詞の他に非定形動詞を含む主節(ただし,主語・目的語いずれも代名詞類ではない)

I. SvVO	5	42%
II. SvOV	1	8%
III. vSVO	4	33%
IV. vSOV	1	8%
V. SOvV	1	8%
計	12	

- I. SvVO Jlk of you shal haue castles ten (1443)
 “Each of you shall have ten castles”
- II. SvOV man shal god wille haue (601)
 “man ought to have goodwill”
- III. vSVO þer mouthe men se /þe moste ioie... (2321-22)
 “there the men could see the greatest joy”
- IV. vSOV For hire shal men hire louerd slo (1746)
 “For her men must kill her husband”
- V. SOvV non þe dom ne durste lette (2820)
 “no one dared obstruct the judgment”

1.1.2.1.定形動詞のみを含む主節(ただし,主語・目的語のいずれか,もしくは両方が代名詞類)

I. SvO	97	54%
II. SOv	19	11%

III. OSv	25	14%	
IV. OvS	14	8%	
V. vSO	23	13%	
計	178		
I. SvO	Jch haue in honde a ful god ore —		(1887)
	“I have a very good oar in my hand”		
II. SOv	Neueremore he him misseyde		(994)
	“He never affronted him”		
III. OSv	Mani god fish þer-inne he tok		(752)
	“He caught a lot of good fish in it”		
IV. OvS	þat forwarde makeden he —		(555)
	“they made that compact”		
V. vSO	Of knith ne hauede he neuere drede		(90)
	“He never had fear for knights”		

1.1.2.2. 定形動詞の他に非定形動詞を含む主節（ただし、主語・目的語のいずれか、もしくは両方が代名詞類）

I. SvVO	25	28%	
II. SvOV	19	21%	
III. vSVO	12	13%	
IV. vSOV	16	18%	
V. OvSV	9	10%	
VI. OvVS	1	1%	
VII. OSvV	4	4%	
VIII. VOSv	1	1%	
IX. vOSV	1	1%	
X. VSvO	1	1%	
計	89		
I. SvVO	J shal flemen þe of londe		(1161)
	“I will banish you from this country”		
II. SvOV	Gladlike I wile þe paniers bere —		(806)
	“I will carry the baskets with pleasure”		
III. vSVO	Haue Ich gadred you for no gamen		(2578)
	“I have mustered you for no frivolity”		
IV. vSOV	So wolde he his mester lere		(824)

- “So he wished to learn his occupation”
- V. OvSV þe herles mete hauede he bouth /Of Cornwalie (884-85)
 “He had bought the food for the earl of Cornwall”
- VI. OvVS þe shal spusen mi cokes knaue – (1124)
 “My cook’s servant shall wed you”
- VII. OSvV His sorwe he couþe ful wel miþe (949)
 “He could conceal his sorrow very fully”
- VIII. VOSv drepen him he wolden yerne (1866)
 they wanted to slay him eagerly
- IX. vOSV To wronge nicht him noman bringe (72)
 “No man could bring him to evil deeds”
- X. VSvO don Ich haue /þat þou me bede of þe knaue (668-69)
 “I have done what you commanded to me regarding the boy”

1.2.1.1. 定形動詞のみを含む従属節 (ただし, 主語・目的語いずれも代名詞類ではない)

I. SvO	10	91%
II. SOv	1	9%
計	11	

- I. SvO Hwan Ubbe hauede þe gold ring (1643)
 “When Ubbe had the gold ring”
- II. SOv þat men fro him his birþene nam (901)
 “that the men received his load from him”

1.2.1.2. 定形動詞の他に非定形動詞を含む従属節 (ただし, 主語・目的語いずれも代名詞類ではない)

I. SvVO	2	40%
II. SvOV	1	20%
III. vSVO	2	40%
計	5	

- I. SvVO als men mithe telle a pund (2616)
 “while the men could count out a pound”
- II. SvOV þat God self shulde his soule leden /Jnto heuene (245-46)
 “that God himself should lead his soul to heaven”
- III. vSVO þere michte men se /þe meste sorwe (232-33)
 “where men could see the greatest sorrow”

1.2.2.1. 定形動詞のみを含む従属節 (ただし, 主語・目的語のいずれか, もしくは両方が代名詞類)

I. SvO	36	51%
--------	----	-----

II. SOv	29	41%	
III. OvS	1	1%	
IV. vSO	4	6%	
計	70		
I. SvO	Or he dide ani oþer dede		(1357)
	“Before he did any other deed”		
II. SOv	But þu þis man understonde		(1160)
	“Unless you accept this man”		
III. OvS	þat him ne hauede grip or ern		(573)
	“that a vulture or an eagle did not catch him”		
IV. vSO	þat euere et Ich bred of koren		(1880)
	“that I ever ate bread of corn”		

1.2.2.2.定形動詞のほかに非定形動詞を含む従属節（ただし、主語・目的語のいずれか、もしくは両方が代名詞類）

I. SvVO	18	26%	
II. SvOV	35	52%	
III. SOvV	8	12%	
IV. SVvO	1	1%	
V. vSVO	2	3%	
VI. OvSV	2	3%	
VII. vOVS	1	1%	
計	67		
I. SvVO	þat Y mithe seken mi ware		(1630)
	“that I could seek my merchandise”		
II. SvOV	Hwan he haueden alle þe king gret		(2291)
	“When they have all saluted the king”		
III. SOvV	Hwan þe swike him hauede heþede		(552)
	“When the traitor had strictly enjoined him”		
IV. SVvO	And til þat she louen muthe /Wom-so...		(196-97)
	“And till she might love whomever...”		
V. vSVO	So mote Ich brouke mi rith eie		(2546)
	“As I could enjoy the use of my right eye”		
VI. OvSV	þat hire sholde noman wedde		(1114)
	“that no man could wed her”		

VII. vOVS so þat wit no salue /Ne sholde him helen leche non (1836-37)

“so that with any healing ointment no physician could restore him to health”

以上のことから次のことが言える。第1に、主節・従属節いずれの場合も SVO の語順の頻度が極めて高い。第2に、その一方で、『ハヴロック』の英語は非常に多様な語順の型を示している。特に、定形動詞ばかりでなく非定形動詞が現れた場合の語順はいつそう複雑になる。これらのデータを基に、以下でこれがどのように統一的に説明できるか考察していく。

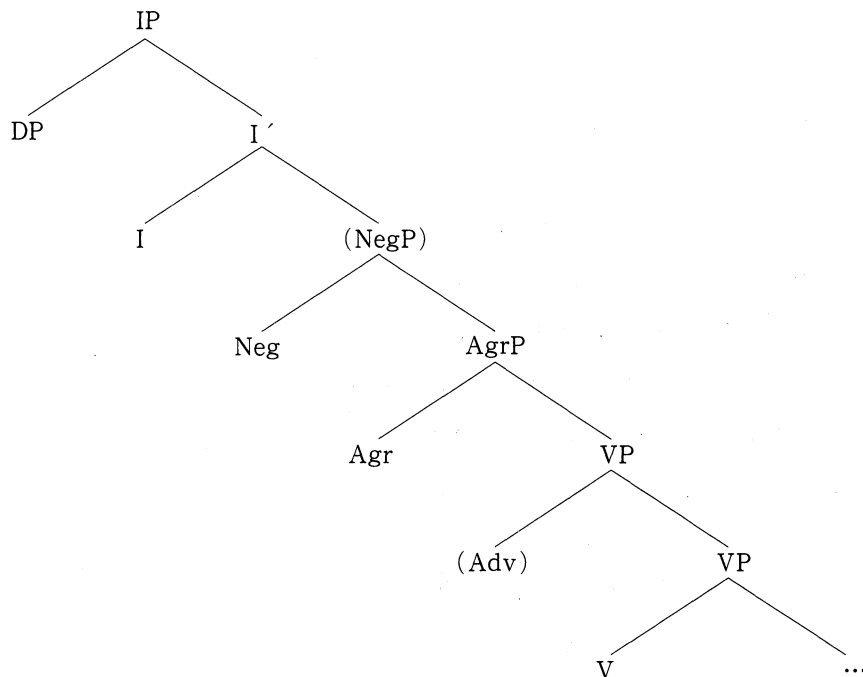
2. 英語史における語順の変化

第1節で提示してデータを分析していく前に、語順型を明らかにするために、ここで採用する文構造の理論的枠組みをまず示していく。

2. 1. 文の内部構造

Chomsky (1986) 以降、Xバー理論が N, V, A, P といった語彙範疇ばかりでなく、C, I などの機能範疇にまで拡大された。その後の機能範疇の研究の中でも、ここでの議論に最も関わりのある注目すべき研究は Pollock (1989) である。そこでは、否定辞・疑問文形成・副詞の位置・遊離数量詞等の統語法について英語とフランス語とを比較することによって、文 (IP) の内部構造が詳細に解明されている。Chomsky (1986) では IP 内部の機能範疇は I だけに限られていたが、I の中にも一致要素 (Agr) と時制要素 (Tense) とが存在することはすでに示唆されていた。³ そこで、ふたつの機能範疇の最大投射 AgrP と TP を IP 内部に設定し、さらに否定文の場合にはこれに NegP が生じるような構造を提案している。ここでは、『ハヴロック』における語順を検討するのに十分な(3)の文構造を仮定する。⁴

(3)



NegP は丸括弧に入れてあることから分るように、否定文の場合にのみ生じ、肯定文では省略される。語彙範疇 V はたとえ何の語形変化を示していない場合でも、表層に現れるまでに時制・一致要素と結び付かなくてはならない。そこで問題になってくるのは、V が I へ移動するのか、I が V へ移動するのかということである。時制・一致要素と V の基底の位置の間に何も介在する要素がない場合はどちらが移動しようと同じ結果しか得られないので判別できない。しかし、両者の間に否定辞や副詞類が生じてくる場合には明確な違いが観察される。次の例を考えてみよう。

(4) [IP DP I ([Neg not/pas]) [VP (Adv)V...]]

(5) a. *John likes not Mary.

b. Jean (n') aime pas Marie.

(6) a. *John kisses often Mary.

b. Jean embrasse souvent Marie.

c. John often kisses Mary.

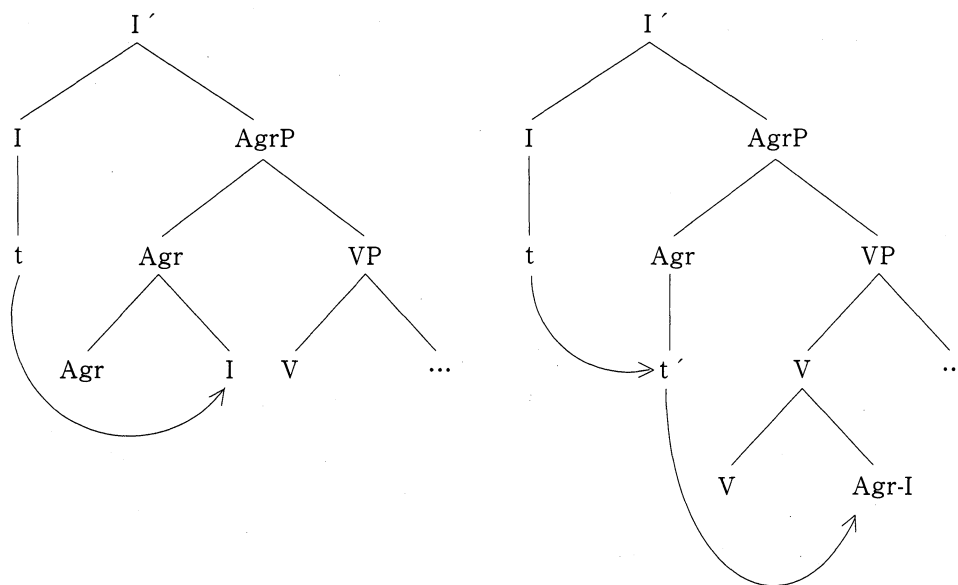
d. *Jean souvent embrasse Marie.

(Pollock (1989: 367))

まず、英語の場合、(5 a), (6 a) の例では、否定辞・副詞類の左側に動詞要素が現れているので V が I へ移動したものと考えられるが、非文になっている。それに対して、I の方が V に移動したと考えられる (6 c) の例は文法的である。従って、英語では、I が V に繰り下げられたものと考えられる。この変化を必要な部分だけ図に示すと次のようになる。

(7) a.

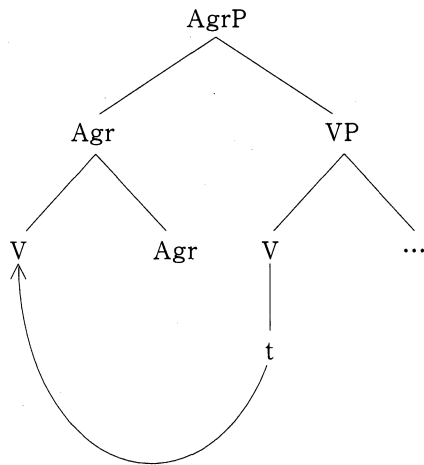
b.



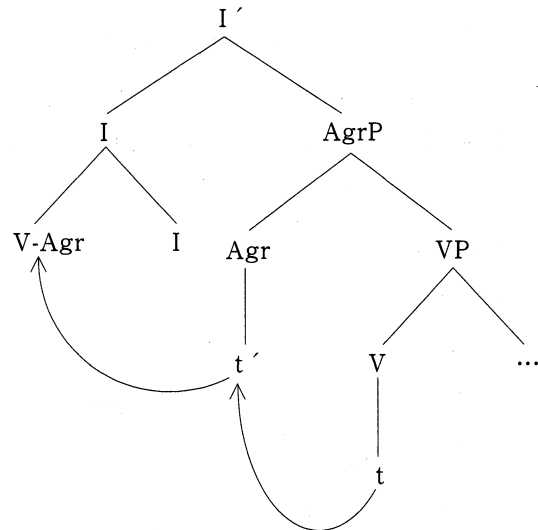
次に、フランス語の場合、英語とは逆の振る舞いを示している。すなわち、(6 d) に示すように、副詞類の右側に動詞要素が現れていて、I が V の方へ移動したと考えられる例は非文法的である。一方、(5 b), (6 b) のように、V が I の方へ繰り上がったと思われる例は文法的である。

この移動の過程を同じように図示してみる。

(8) a.



b.



2. 2. OE から ME にかけての基底語順の歴史的变化

『ハヴロック』の英語の基底語順を特定する前に、英語の基底語順の歴史的变化について考えておく。というのも OE から ME にかけて、屈折変化の水平化と共に語順の固定化（あるいは変化）があったとされるのであるが、言語変化は長い時間をかけて徐々に生じるものであり、『ハヴロック』の英語が純粋に ME の特徴を反映しているか検討が必要であると思われるからである。例えば、語彙の構成を福元（1992）から見てみると次のようになる。

(9) a. 英語本来語	1369語	83%
b. ロマンズ諸語	150語	9%
c. 北欧語	135語	8%

ME は、ゲルマン系の言語に、フランス語・ラテン語などのロマンス諸語の影響が及んで出来上がったものである。ところが『ハヴロック』の舞台がデンマークを中心とする北欧であることを反映してか、(9)の統計を見る限りロマンス諸語の影響はそれほど大きくないのではないかという予想が成り立つ。また、関係詞を見ても、OE から存在していた自由関係詞 (free relative) を除けば Wh 関係詞はひとつも観察されない。ゲルマン諸語の関係詞には指示詞 (demonstrative) が使われ、他方ロマンス諸語の関係詞は疑問詞が使われるのが一般的である。ところが、『ハヴロック』の英語では、先ほど触れた例外を除くと、OE の指示詞から発達した *þat* ばかりである。このことから、『ハヴロック』の英語は、まだロマンス諸語の影響の少ない、OE の基底語順をいくらかなりとも反映しているかもしれないという予想が成り立つ。そこで、以下で OE の基底語順と ME の基底語順の歴史的变化を辿っていく。

2. 2. 1. OE の基底語順

OE の語順については、主節の場合、定形動詞が第 2 番目の位置を占め、従属節では定形動詞が節の最後で、非定形動詞はその前というのが一般的である。

- (10) a. Se swicola Herodes cwæð to ðam tungel-witegum (SvX) (AHTh, I, 82, 15)
 the treacherous Herod spoke to the star-wise men
 “the treacherous Herod spoke to the astrologers”
- b. eall ðis aredað se reccere swiðe ryhte (OvSX) (CP, 168, 3)
 all this arranges the ruler very rightly
 “the ruler arranges all this very rightly”
- c. þy ilcan geare drehton þa hergas on East englum &... (XvSX) (Parker 895)
 the same year harried the armies in East Anglia and...
 “in the same year the armies harried east Anglia and...”
- d. þonne beoð eowere eagan geopenede (XvSV) (AHTh, I, 18)
 then are your eyes opened
 “then your eyes are opened”

(Kemenade (1987: 17-19))

- (11) a. þæt ic þas boc of Ledenum gereorde to Engliscra spræce awende (CSOXXv)
 (AHTh, I, pref, 6)
 that I this book from Latin language to English tongue translate
 “that I translate this book from the Latin language to the English tongue”
- b. þæt Darius hie mid gefeohte secan wolde (CSOXXv) (Oros, 45, 31)
 that Darius them for battle visit wanted
 “that Darius wanted to seek them out in order to battle with them”

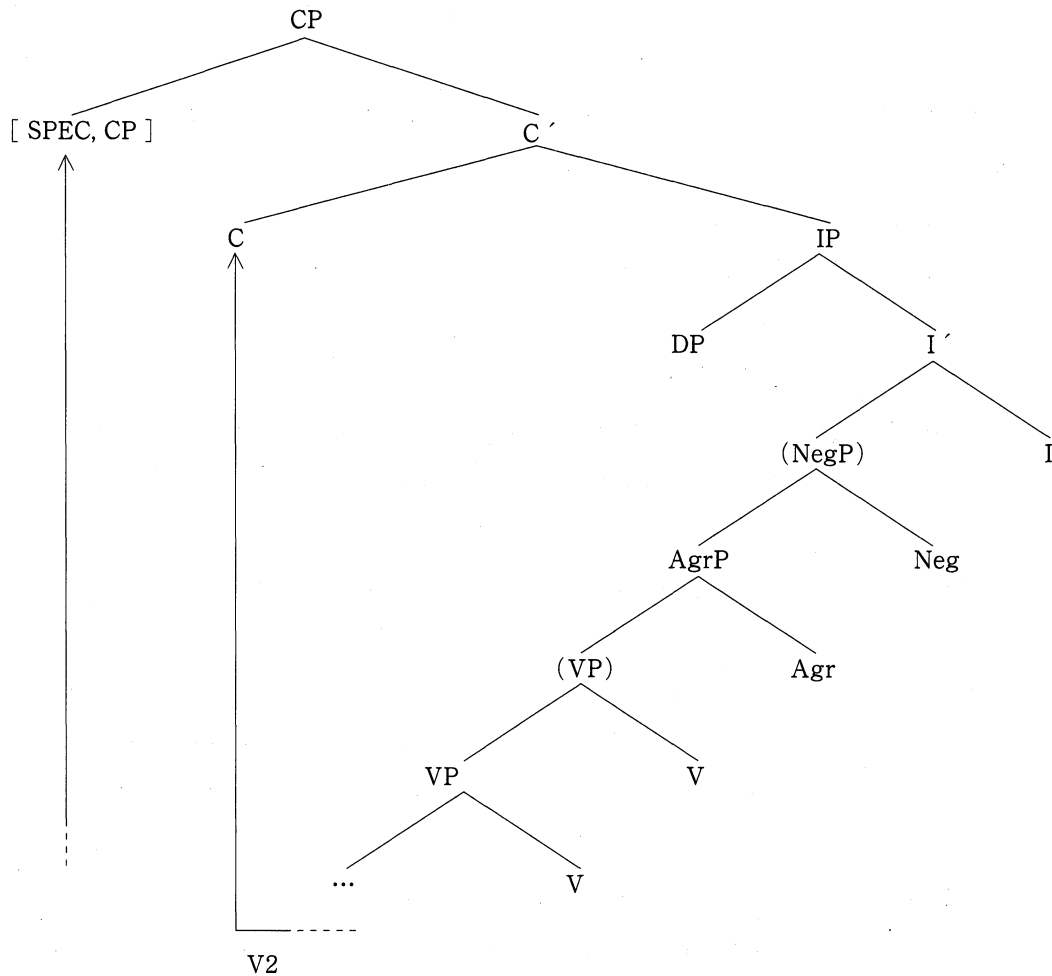
(Kemenade (1987: 16-19))

(10a) では主語、(10b) では目的語、(10c, d) では副詞類がそれぞれ文頭に現れている。(10d) は定形動詞と非定形動詞のふたつが生じている例である。すなわち、(10)の主節の例では、文頭に入る要素が何であろうと、全て定形動詞が文中の 2 番目の位置を占めている。これに対して、(11)の従属節の例ではどちらも定形動詞が節の末尾の位置に生じている。

これが最も一般的な OE の語順であり、それ以外の例外的な語順は動詞（句）上昇、接語化、その他の文体上の操作によって派生されると普通主張されている。⁵ 一般に OE の基底語順は、従属節内でごく普通に見られる SOV であり、定形動詞が 2 番目の位置に生じる主節の語順は、ゲルマン諸語に観察される V 2 現象 (verb second phenomenon) によるものであると考える研究者が多い。⁶

これを樹形図によって示すと次のようになる。

(12)



(12)で、従属節の場合は文頭のC節点が埋まっているために、時制・一致要素と動詞が結合するだけなので、文末に定形動詞が現れることになる。主節の場合には、[SPEC, CP]の位置に主語や目的語・副詞類等の要素が入り、定形動詞がC節点を占めることによって、V2現象が生じると説明される。従って、OEの基底語順はSOVであるということになるが、ここでもこのSOV仮説を採用する。

2. 2. 2. SOV から SVO へ

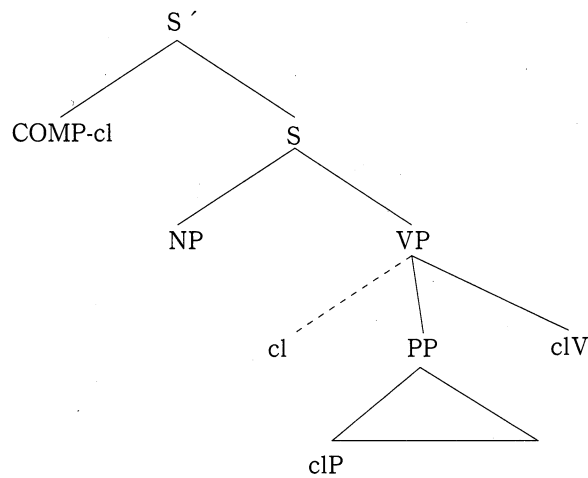
一般的には、OEのSOVという基底語順がMEではSVOに変化したと考えられている。すなわち、(12)から(3)へと構造の変化が生じたというわけである。この証拠をいちいち検証することはしないが、詳しい議論についてはKemenade (1987, 1992), Lightfoot (1991), Denison (1993)を参照されたい。後に見ていくように、『ハヴロック』の英語ではこの変化がすでに完了していたものと考えられる。

3. 考察

本節では、2節で提示した理論的枠組みを基に、1節に挙げたデータの分析を試みる。

主節・従属節いずれの場合もそうであるが、代名詞類を含まないグループと含むグループに分けたのは、代名詞類が、Kemenade (1985, 1987) でいう接語 (clitic) として機能していると考えられるからである。例えば、Kemenade (1985) では OE の不定詞補部の分析の中で、人称代名詞や場所を示す一部の代名詞類を接語と分析している。するとこれらの要素は、(13)に示すように、かなり自由に、いろいろな位置に現れていることが明白だ。⁷

(13)



(Kemenade (1985: 79))

(13)では、cl で示された場所が接語の現れる位置である。要するに、接語は通常の名詞類に比べて、軽い要素なので様々な場所に移動することが可能だというわけである。

すると、もし『ハヴロック』の英語に出てくる代名詞類が接語であるとすれば、韻律・脚韻の要請によって語順を組み替えなければならないような韻文では、頻繁に接語化が行われることが予想される。その当然の帰結として、代名詞類を含む文は、これを含まない文よりも、多様な語順を示すことになるはずである。そして実際、1節のデータが示すように、主節・従属節いずれの場合も、代名詞類を含んだグループ (1.1.2.1.節, 1.1.2.2.節, 1.2.2.1.節, 1.2.2.2.節)の方が語順の型は多くなっている。さらに、すぐ後に指摘するように、多いだけではなく基底語順にかかる操作がより複雑になっている。

また、基底語順に様々な変形操作が加わっているとすれば、基底語順の方が無標であるということになり、従ってその数も多いことが予想される。そしてこの場合もまた、予測通りに SvO あるいは SvVO という語順の生起する数が圧倒的に多くなっている。

もう少し具体的に、1.1.1.1.節から1.2.2.2.節のそれぞれのグループについて見てみよう。まず、主節の場合、1.1.1.1.節の代名詞類を含まないグループの語順のパターンは、SvO, SOv, OSv, OvS 4つであるが、これに対応する1.1.2.1.節のグループは5つである。パターンの数はひとつしか違わないけれども、前者では基底語順のパターン SvO が断然多いのに対して、後者では基底語順から逸

